

実践のまとめ（第2学年 英語科）

新発田市立本丸中学校 教諭 佐藤 直彦

1 研究テーマ

**事実や考えをその場で整理し、聞き手を意識し伝えることができる生徒の育成
～Task-Based Language Teachingを取り入れた英語授業を通して～**

2 研究テーマについて

(1) テーマ設定の意図

従来の英語学習において、生徒は教科書の内容に沿って英語を学び限定された文法事項の中で表現活動を行ってきた。しかしながら近年グローバル化、デジタル化が進み、世界中の人と容易につながることができるようになり、日本においても英語の有用性が高まってきている。VUCAと言われるこれからの社会を生きる生徒たちは、英語をコミュニケーションツールの一つとし、自分の考えを限定的でない様々なシチュエーションで伝えることができる力が求められる。

そこで本研究ではTask-based Language Teaching（以下TBLT）という教授法で授業を展開していく。TBLTはタスク中心教授法と訳され、コミュニケーションを中心としたアプローチである。その名の通りタスク（課題）を使って外国語を習得しようとする教育法である。

タスクはコミュニケーションの伝達（課題の達成）が目的であり、エクササイズは言語形式を正確に使えたかが目的になる。TBLTでは、言語はコミュニケーションで使えるように学ぶのではなく、コミュニケーションで使っていく中で学ぶとされる。（和泉2009）。

TBLTは主体的・対話的で深い学びを醸成する土壌として有効であると考え、研究テーマとした。

(2) 研究テーマに迫るために

①Focus on Formを取り入れた指導

本研究ではFocus on Form（フォーカス・オン・フォーム）という教授法にも焦点を当てて授業を展開していきたい。新学習指導要領が始まり英語教育に関して様々な提言がなされているが、そのほとんどは「目標の提示」か「学習形態の提案」のいずれかであるように思う。国立政策教育研究所からの要請も多くの場合、英語能力の目標レベルや評価規準という形で示され、学習到達目標（Can Do）への関心も学習目標に関連したものである。それらが方法論の検証を伴っていることは少ない。確かに文部科学省から授業モデルが紹介されていることもあるが、それがどのような教授法であるか明言されることはあまりない。アクティヴ・ラーニングや協働的学習、タブレット端末の導入など学習形態がクローズアップされがちだが、どのような指導方法が言語習得に効果的かという側面も同時に配慮する必要があるように考える。

そこで本研究ではTBLTを軸としたFocus on Form（フォーカス・オン・フォーム）（以下 FonF）という教授法が、言語習得に効果的かどうかを検証する。FonFは意味あるコンテキストの中で、学習者の注意を必要な形式面へ向けさせていくことで、実践的なコミュニケーション能力を身に付けさせようというアプローチである。

言語習得には3つの要素が関わっている。「言語形式」(form)、「意味内容」(meaning)、「言語機能」(function)である。これら1つでも欠けるとコミュニケーションとして成立しなくなってしまう。FonFはその3つの結びつきを土台とし、言語習得へ

の支援を積極的にしていこうとするものである。

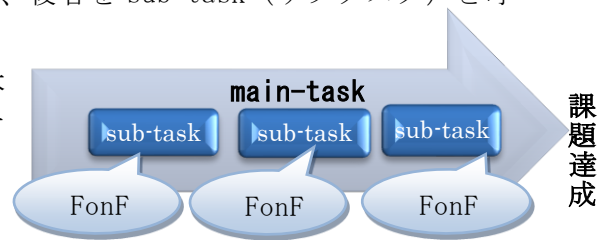
FonFの考え方は、新学習指導要領で示しているものとも符号する。新学習指導要領の外国語の目標（1）には「外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする」とある。また「文法をその伝える内容や目的、場面、状況といったことと分離せずに、それらと密接に関連させた形で、効果的な導入、指導、練習方法を工夫することが求められている。文法構造の概念的な理解だけ追求して、一方的な教師の説明に終始するのではなく、コミュニケーションの目的を達成させる上で、いかに文法が使われているかに着目させて、生徒の気付きを促す指導を考えるべきである。（第2章第2節3（2）エ 文法の事項の指導）」とも明示されている。これこそまさにFonFの指導内容と合致している。

コミュニケーション力の育成を目指すには、文法説明と英文法ドリルと発話活動の形式中心教授法から脱却し、意味内容が豊富な授業を目指していかなければいけない。FonFは意味あるコンテキストの中で、学習者の注意を言語形式に向けさせる比較的新しい指導アプローチであり、それが中学生にとっても有効であると考えている。

②メインタスクとサブタスクの入子構造で単元を構成する

Taskには強度のtaskと弱度のtaskがあると考えている。強度のtaskは言語使用の自由度が高く、1時間の授業で完結することが難しい素材のことを指し、弱度のtaskとはある程度目標言語材料が定まっており、1時間の授業で課題解決まで導ける素材のことを指すことにする。前者をmain-task（メインタスク）、後者をsub-task（サブタスク）と呼ぶことにする。（図1）

今回の単元では「イギリスに住む人たちに、日本文化を紹介しよう」という設定をmain-taskとして扱う。しかし、最初からこのtaskに取り組むには生徒にとって難易度が高すぎるため、sub-taskを取り入れて単元を構成していく。その際にFonFを用いながら比較（比較級・最上級・原級）に焦点を与えながら授業を進める。



単元構成のイメージ（図1）

③プレゼンテーションをインプット活動と位置づける

今回の単元の目標は、「事実や考えをその場で整理し、聞き手を意識し伝えることができる生徒の育成」である。多くの授業では発表（スピーチ）単元の章末に行ってアウトプット活動としがちだが、用意した原稿を丸暗記でスピーチを行っても、実際のコミュニケーション場面にはそんな状況はない。そこでスピーチを行ったのち、スピーチと平行な題材で会話を行えば、スピーチの内容（インプット）をその場で整理し、相手の質問に対して必要な情報を整理し、会話の中で産出できるのではないかと考える。

(3) 研究テーマに関わる評価

パフォーマンステスト（話すこと〔やりとり〕）の中で、必要な情報をその場で整理しALTの質問に答えることができる。

3 単元と指導計画

(1) 単元名

Lesson5 Things to Do in Japan (NEW CROWN English Series2 三省堂)

(2) 単元（題材）の目標

- ・日本の文化やおすすめの場所、食べ物について、これまで学習した英語の表現を正しく使い、書いたり話したりできる。
- ・比較の特徴やきまりを理解し、書いたり、話したり、読んだりすることができる。
〔知識及び技能〕
- ・日本の文化やおすすめの場所、食べ物について、その場で考えや情報を整理し、聞き手に伝わりやすいよう工夫して話することができる。
〔思考力・判断力・表現力等〕
- ・日本の文化やおすすめの場所、食べ物について、その場で考えや情報を整理し、聞き手に伝わりやすいよう工夫して話そうとしている。

〔主体的に学習に取り組む態度〕

(3) 本単元における具体的な手だて

①教師と生徒が協働的に展開する授業

<手立てア>

相手の質問の意図や要望を汲み取り、課題解決に向けた方策を生徒と協働的に考案する。

本単元の main-task は「イギリスに住む人たちに、日本文化を紹介しよう」である。この task は非常に抽象度が高く、生徒は最初に何を伝えたらよいか分からず戸惑うはずである。教師と生徒のやりとりのなかで、日本文化とは伝統芸能だけでなく、大衆文化（ポップカルチャーやサブカルチャー）や自分の周囲の環境だと考えて良いことを、生徒とのやりとりの中で伝える。その途中で“What do you like to do?” という質問を生徒に投げかけ “I like to watch YouTube.” “I like to read manga.” などの答えが出れば、好きな YouTuber や好きなマンガを教えれば良いという具体的な答えが見出されるだろう。また task の解決の方法も生徒と協働的に練りたい。どのような方法で伝えれば良いか意見を出し合い、どのような内容を伝えればよいか教師主導で考えるのではなく、生徒主体で解決方法を見出したい。より質の高い情報としてクラスにアンケートを取る手法や、インターネットで検索することなどが生徒から生まれるようにやりとりの中で導いていきたい。これらのやりとりは当然ながらティーチャートークを用いて教師は英語で授業を展開していく。

<手立てイ>

より良い発表になるように、プレゼンテーションのルーブリック評価を生徒と協働的に考案する。

授業ではこれまで何度もスピーチを行ってきたが、そのルーブリック評価はほとんどが教師が定めたものだった。今回は動画で録画することを最終目標としたいため、普段の全体での発表とは少し違う評価基準を設け、デリバリーにも力を入れなければいけないと考える。また同じ日本人や日本に長く滞在している ALT に向けての発表ではないため発音やアクセントにもより注意を向ける必要がある。生徒自ら評価基準を設定することで、生徒が学習意欲を示し、学習の目標を立てるようになることを期待する。ただしこのルーブリックはデリバリーに特化したもので、実際の成績には評価として含めない。

②Focus on Form による文法教授

<手立て a>

ティーチャートークによる生徒とのインタラクションを豊富に行う。

生徒とのやりとりの中で授業を展開していく上で最も大切なことは、教師自身がティーチャートークを駆使し英語の発話量を増やすことだ。ティーチャートークとは、言語学習のために分かりやすい表現を用いた教師が使用する英語のことである。今回は生徒と協働的に単元を構成したり、評価を考案したりすることを目指す。教師は意識しないと日本語で授業

を進めてしまいがちになる。ティーチャートークを用いることで生徒とのやりとりは、生徒にとって良いインプットとなる。

<手立て b>

教科書を編集したモデルを提示し、Focus on Form の手法を取り入れ暗示的に目標言語形式の気付きを与える。

今回の目標言語材料は比較であるが、これを「形式」(form)だけを生徒に教えることはせず、「意味内容」(meaning)、「言語機能」(function)の結びつきを強くしたモデル文を生徒に提示する。比較の言語形式は生徒に暗示的な手法 (implicit attention-attracting technique) も用いて、生徒にそれとなく気付いてもらう。その際に教科書の本文を (New Crown2 Lesson5 GET1, GET2, GET3) を本単元のTaskと関連のある内容に書き換え、生徒に提示する。生徒はモデル文の文脈の中で比較の意味・用法を推察し、タイミングをみて教師が比較用法の言語形式を説明することで生徒の気付きも促され、内在化が促進されるだろう。

(4) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・比較（比較級・最上級・原級）の特徴やきまりの理解をもとに、身近な話題について読んだり、話したり、書いたりする技能を身に付けている。	・外国に住む方の質問に対して、表現や構成を工夫して中学生の立場から日本で流行していることを、聞き手を意識して英語で説明することができる。	・外国に住む方の質問に対して、表現や構成を工夫して中学生の立場から日本で流行していることを、聞き手を意識して英語で説明しようとしている。

(5) 単元の指導計画と評価計画（全10時間、本時3／10時間）

時	時間のねらいと活動内容	教師の支援・指導	評価基準
1	○Task を認知する場面 ・イギリス人から「日本に旅行したいのでおすすめや日本の文化を紹介してほしい」という依頼を受ける。 ・イギリスを紹介する英文を読む。 ・個人で依頼内容について考える。	・授業者の妹からの依頼内容を英語で紹介する。〈手立て a〉 ・教科書 Lesson 5 GET1 の本文をイギリスの紹介に編集し、内容把握と比較級と最上級の形式に着目させる。〈手立て a・b〉 ・ロイロノートで “What do you like to do, when you are free?” の質問を送り生徒に回答させる。	【主態】 ワークシート ロイロノート 提出
2	○Task 解決に向けて生徒と共にそのプロセスを考案する活動 ・前回の回答を、ロイロノートを用いてクラスで共有しながら、依頼内容にどのように回答すればよいか個人 ・グループで方策を考える。 ・生徒の回答から6～8つのジャンルに分けグループを組織する。	〈手立てア〉 ・どのような形式で返答すればよいか、依頼内容について相手はどのような情報を期待しているか、“How can we answer their requests?” “What anime is the most popular in this class?” “They want to visit Japan someday. Which place are you going to recommend?” などの問いを投げかけ、生徒の思考を深める。〈手立て a〉 ・相手のニーズに応える情報として、アンケートをとり統計的な情報を含めると個人の主観に偏った情報にな	【主態】 ワークシート ロイロノート 提出

	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスメイトに、質問するアンケートを考え、ロイロノートで教師に提出する。 	<p>らないことに気付かせる。〈手立て a)〉</p>	
3 Sub-Task ① 本時	<ul style="list-style-type: none"> ○Pre-writing (紹介する文を書く活動) ・ロイロノートを使用して、クラスでとったアンケート結果を見る。 ・アンケート結果をもとに、個人で紹介する文を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ picture words ・ロイロノートを使用し、アンケートの集計結果をグループで共有させる。 ・比較表現が必要な場面に直面させ、生徒の必要性を高める。 ・Pre-writing を提出させる。 	【知・技】 ワークシート 【思・判・表】 ワークシート
4 Sub-Task ②	<ul style="list-style-type: none"> ○モデル文を読解する活動① ・Lesson 5 の GET 2・3 を編集したモデル文を読解する。 ・比較用法の明示的説明をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ picture words ・教科書 GET 2・3 を編集したモデル文を提示する。比較表現のポイントを生徒に気付かせる。(インプット強化) 〈手立て b)〉 ・比較用法の説明を日本語でする。 	【知・技】 ワークシート
5 Sub-Task ③	<ul style="list-style-type: none"> ○モデル文を読解する活動② ・Lesson 5 の USE Read を編集したモデル文を読解する。 ・トップダウン活動をする。 ・ボトムアップ活動をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ picture words ・オーラルイントロダクションでスキーマを高める。 ・スキヤニングとスキミングで要旨をつかむ。 ・ワード/フレーズハントをする。 ・文法・語法フォーカスをする。 〈手立て b)〉 	【知・技】 ワークシート
6	<ul style="list-style-type: none"> ○Pre-writing を再考する活動(Post-writing) ○良い紹介文の評価を生徒と協働的に考案する活動 ・最初に書いた文を、比較表現を踏まえてもう一度考えて書く。 (Post-writing) ・最初のグループになり、グループでもそれぞれの英文を再検討する。 ・依頼の返答に必要な情報を加えたり、表現方法を工夫したりしながら、新たな紹介文を完成させる。 ・グループで互いの紹介文を持ちより、1つの発表を考える。 ・振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> ・Pre-Writing の作文を書き直す(書き足す)ように指示する。 ・外国に住む依頼人に伝えるには、何が大切かを考えさせる。 〈手立て a)〉 ・モデル文に参考となる表現が豊富に含まれていることを示す。 ・最初のグループで再び集まり、互いの英文を回し読みする。仲間の英文について、フィードバックや質問をする。 ・Pre-Writing との振り返りを、 *GOOD・BAD・NEXT の視点で書かせる。 	【思・判・表】 ワークシート *授業で取り入れている振り返りの視点 GOOD : 授業での自分の成果 BAD : 自分の課題 NEXT : 次回に向けて自分の抱負

7	○ルーブリック評価を協働的に考案する活動 ・生徒と評価を考える。 ・前回と同様にグループの紹介文を考える。 ・Key Note で発表の資料を作る。 ・作った評価を基に発表の練習をする。	〈手立てイ〉 ・動画を送ることで、依頼者からの返答をするので、何が大切か考えさせる。〈手立てa〉 ・より分かりやすい発表を目指し、スライドも作成するように指示をする。	【主態】 ワークシート
8	○ALT にグループで発表する活動 ・練習した紹介をALT に向けて発表する。 ・動画で記録する。 ・ALT からのフィードバック ・振り返り	・本番の録画前にALT にむけて発表する。 ・ALT からは、発音や文法の修正、デリバリーのアドバイスをもらう。 ・録画した自分たちの発表を見て、改善点を練習する。 ・振り返りを、GOOD・BAD・NEXT の視点で記述させる。	【思・判・表】 【主態】 動画データ 振り返り シート
9	○イギリス人の方々にむけた日本の紹介を録画する活動 ・グループごとに発表を録画する。 ・振り返り	・最初の録画データと、本日の録画データを比べ、振り返りをGOOD・BAD・NEXT の視点で記述させる。	【思・判・表】 【主態】 動画データ 振り返り シート
後日	○Performance Test	・ALT と会話テストを行う。 ALT が「妹が日本旅行をしたいが、おすすりはあるか？」というテーマで生徒に質問をする。	【思・判・表】 評価シート

4 単元と生徒

(1) 単元について

生徒はこれまでに様々な task を通じて Speaking 活動、Writing 活動、Reading 活動を行ってきた。本単元は目標とする言語材料を比較に定めている focused task であるが、比較の文法においては FonF を用いて生徒の気付きを促したい。生徒にとってやや難易度が高いと予想されるが、単元を通して、試行錯誤しながらも英語で自分の考えを表現できる喜び、自分の考えを英語で伝えることができた喜びを実感できることに本単元を学ぶ意義があると考える。

また日本人同士で、英語で日本文化の紹介をするだけでは生徒の目的意識は醸成されにくい。生徒が目的意識をもって課題に取り組むための状況設定が必要である。そこでイギリスで暮らしている授業者の妹が、イギリス人の友人から「パンデミックによる規制が緩和され、そして円安の現在、日本に旅行する機会をうかがっている。そこで旅行するならお薦めの場所や食べ物は何か教えてほしい。また日本の学生の間では何が流行しているかも教えてほしい。」という場面を設定し、生徒に英語で表現する上での明確な目的意識をもたせる。日本で流行しているものや、クラスメイトへの調査、インターネットで人気のランキングサイト等を情報として用いることで、自然と比較表現を使用できることを期待する。

本単元では、上記の課題解決のプロセスを生徒自ら考案できるように支援したい。自分の学校の生徒間で何が流行しているか、何が人気なのかを調査するような案が生徒から出れば、その内容の発表には比較表現を用いる必要性が出てくるはずだ。まずは Pre-writing として初期段階で紹介文を書かせ

る。その後モデル文を提示し、Post-writingとして再考させる。モデル文がインプットとなり、Post-writingでは比較を取り入れ、より表現の幅が広がった英文になることを期待する。最終的な課題解決方法は、時差の関係からオンラインでのやりとりが難しいこと、そして個人での電子メールは人数が多すぎることから、グループでプレゼンテーションしたものを動画で送ることに導いていきたい。

さらにプレゼンテーションを行う際にも教師と生徒が協働して評価基準を作成する。プレゼンテーションはALTにまず聞いてもらい、発音矯正などのフィードバックをしてもらう。プレゼンテーションを修正した後、グループごとに発表し動画に録画する。

発表内容は動画で記録し、無料動画投稿サイトにプライバシーを保護した形式でアップし、URLを送り現地でも視聴できるようにする。録画動画はその発話量や内容、比較表現の使用回数などを、目標言語が習得できたかの判断材料とする。

(2) 生徒の実態

本クラスの生徒は、計29人である。年度当初の英語学習に対しての意識調査では、「英語が苦手である」と答えた生徒は全体の80%以上おり、実際に単語や文法の知識不足が原因で言いたいことが英語で言えないという状態が、授業中によく見られた。しかしながら、本クラスはこれまで様々なTaskを通して、英語学習を進めてきた。英語でナレーションに挑戦したり、環境問題について調べプレゼンしたり、英語で表現することを中心に授業をすすめてきた。英語が苦手な生徒も徐々に自分の考えを英語で伝えることに慣れ、表現も増えてきた。

本単元は生徒がALT以外の外国に住む人に初めて、英語で表現する活動である。生徒が目的意識をもって主体的に取り組み、その実践の中で比較表現を中心に様々な表現を身に付けることを期待する。

5 本時の展開（令和4年10月25日第5校時実施）

(1) 本時のねらい

- ・日本の大衆文化やおすすめの観光地等について、既習言語材料を用いて紹介する技能を身に付けている。 [知識・技能]
- ・日本の大衆文化やおすすめの観光地等について、伝わりやすいように書くことができる。 [思考・判断・表現]
- ・日本の大衆文化やおすすめの観光地等について、伝わりやすいように書こうとしている。 [主体的に学習に取り組む態度]

(2) 展開の構想

本単元は授業者の妹の友人で、イギリスに住む方々に日本へ旅行する際にお勧めの場所や食べ物、また学生の間で流行しているものを教えてほしいという設定で、生徒はtaskに対して自分の紹介したいものを英語で表現することが目標である。前時までにその返答方法や内容を生徒と協働的に考案し、本時は実際にライティング作業に入る初期段階（Pre-writing）である。

前時まではクラスでアンケートを行ったり、おすすめの場所を調べたりしたが、まだ比較表現については学習していないので、生徒は比較表現を用いずに紹介文を考えなければいけないので稚拙な英文になったり、筆が進まなかったりすることが予想される。

しかし、次回から比較表現について触れていくので書き直し（Post-writing）をしたときに、比較表現の利便性に気付き、紹介文に取り入れてくれることを期待する。

(3) 展開

学習内容 (time)	生徒の活動	教師の働きかけ	○評価 <留意点> 【観点】 方法
Greeting (1min)	“Good afternoon, Mr. Sato.”	○ “Good afternoon, everyone.”	
Warming-up (12min)	○ Sing a song “The longest time” ○ Picture Words	Sing together	声を出しているか。
Introduction of today’s material (5min) 導入	○ “Last week, we saw the message from my sister’s friends. They wanted to know what things are popular among Japanese students. And they want to know where to visit in Japan. So, today please write an introduction of Japanese culture. We are going to take the video next. “However, it is difficult for you to record the video without practice. So today, let’s write your introduction of Japan.”		〈手立て a〉
	○ 今回の課題を理解しようとする。説明を聞き、今日やることを理解しようとする。	○ 今回の授業の流れを提示する。 “This is today’s schedule.”	
Evolution① (15min) 展開①	○ 前回のアンケート結果等をグループで共有し、その後クラスで共有する。	○ 紹介するジャンルごとのグループに分かれて活動する。	【主態】 動画データ
Evolution② (15min) 展開②	○ 個人で日本文化・おすすめを紹介する文を書く。	○ opening -body -closing の展開を意識させる。4文以上書くよう指示する。 ○ 良い文があれば、ピックアップして共有する。 ○ タブレットは、最初は使わないよう指示する。	
Closing	○ Pre-writing を提出する。 Greeting		【主態】 【知技】 【思判表】 Pre-writing

(4) 評価

- ・ 日本の大衆文化やおすすめの観光地等について、既習言語材料を用いて紹介する技能を身に付けることができた。 [知識・技能]
- ・ 日本の大衆文化やおすすめの観光地等について、伝わりやすいように書くことができた。 [思考・判断・表現]
- ・ 日本の大衆文化やおすすめの観光地等について、伝わりやすいように書こうとしていた。 [主体的に学習に取り組む態度]

【参考】期待する生徒の Pre-writing

Hello! My name is Ayana.
If you come to Japan, please visit Sky Tree. Sky Tree is very popular in Japan. It has beautiful view.

6 実践を振り返って

(1) 授業の実際

① 比較の使用頻度

単元の sub-task の段階（比較の導入前）で日本文化を紹介する英文を、個人で書かせた。生徒は比較表現を学習する前段階で、自分達が調査した日本文化を紹介するためのランキングをもとに、イギリスに住む方々に日本文

化を紹介したい試行錯誤した。その後、教科書を活用したモデル文を読むことで比較表現に注目させ、その機能について説明した（FonF）。その後、紹介文を再考する活動（Post-Writing）を行い、Pre-WritingとPost-Writingでの比較表現の使用回数を比較した。（表1）

表1 Pre-WritingとPost-Writingの比較表現の使用回数

生徒	Pre-Writing		Post-Writing	
	文の数	比較の使用	文の数	比較の使用
A	3	0	5	3
B	3	0	7	3
C	3	0	5	2
D	4	0	8	3
E	3	0	3	1
F	7	2	8	3
G	4	0	4	1
H	9	1	9	3
I	4	0	4	1
J	5	0	6	2
K	4	1	7	3
L	5	0	5	2
M	3	0	4	1
M	1	0	2	0
O	1	0	1	0
P	7	0	9	3
Q	2	0	3	1
R	2	0	5	2
S	1	0	1	0
T	8	0	10	3
U	2	0	2	0
V	4	0	7	2
W	1	0	3	1
X	4	0	7	3
Y	2	0	3	1
Z	10	1	12	4
AA	1	0	2	0
AB	3	0	4	1
AC	3	0	7	2

※間違いがあっても比較を使っていれば数にふくめた

モデル文の導入後、生徒は教師が期待する文のイメージをもつことができたため、Post-Writingでは記述量が増えた。それだけではなく、最上級や比較級を用いた方が効果的に相手に情報が伝わりやすいことに気付き、比較表現を使用する生徒が増えた。一人の生徒の例を示す。（表2）

表2 ある生徒のPre-WritingとPost-Writing

(抽出例) 生徒のPre-Writing	生徒のPost-writing
Hello! My name is kanta. We will tell you our favorite sports. No.1 is tennis. Our class has many tennis players.	Hello. My name is Kanta. We are going to show you popular sports in our class. By the way, what sports do you like?

No.2 and No.3 are basketball and Volleyball. Thank you.	We compared baseball, basketball table tennis, tennis, soccer and volleyball. Now I will show you the result. First, tennis is the most popular sport in my class. There are many tennis players in my class. Second basketball is as popular as table tennis. Third baseball is more popular than soccer.
---	--

対象クラスは全体的に比較の使用頻度が多くなった。細かい文法指導をせず、生徒に気付きを促すことによって自発的に目標言語を使用させることがFonFのねらいである。この段階ではまだ正確に使用することは難しいが、比較の特性に気付き、効果的に使用しようとする生徒が増えたことでFonFのねらいは概ね果たせているのではないだろうか。

またオーセンティックなタスクを設定することで、生徒は自然と聞き手を意識した構成で文章を作成している。What sports do you like?など問いかけを用いることで、相手の関心をこちらの話題に向けさせようとしている。

最終的に同じジャンルのグループごとに動画を作成していく過程に入るが、今度はデリバリーを意識し、「発音」「目線」「ジェスチャー」「スライドの提示」「画角」などを注意し、タスクの達成にグループで協力していく姿が見られた。

② 定期テストでの正確性における成果

定期テストを利用して、比較の文法的定着度合いを測った。問題は、グラフから読み取れることを、比較表現を用いて英作文する問題である。計6問のうち、対象クラスと対象クラスを除いた学年の平均を比べた。結果は(表3)の通りである。

表3 定期テストにおいて比較の文法問題の正答率

	対象クラス	学年平均 (対象クラスを除く)
正答率	51.4%	42.3%

結果はFonFで指導したクラスの方が学年の平均よりも正答率が高かった。クラスによって学力も差があり、担当教員の指導方法も一様ではないため信頼性が高いとは言いがたい。しかしながら、文法一辺倒の授業をせず、意味内容を重視した授業でも言語習得に一定の効果が期待できることは否定できないだろう。

(2) 研究テーマに関わって

① パフォーマンステスト

本研究のテーマは「事実や考えをその場で整理し、聞き手を意識し伝えることができる生徒の育成～Task-Based Language Teachingを取り入れた英語の授業を通して～」である。事実や考えをその場で整理するとは、すなわち即興的に話すことを意味する。今回はイギリスに住む方々に、日本文化を紹介

介するというタスクで、最後はプレゼンテーションまで行う単元構成だが、あらかじめ用意した英文を話すのでは、即興的とは言えない。

そこで本研究では単元が終わった後パフォーマンス課題を設定し、単元で培ってきた表現や語彙をあらかじめ英文を用意できない状況で、スピーキングのやりとりを行うこととした。テーマは「ALTの妹が、日本に訪問しようとして計画しています。あなたなら妹さんが来日した際に、どこに行ったり何をしたりしたら良いか、紹介しますか。」と設定した。その中で生徒は一方的に説明するのではなく、教師と英語でやりとりしながら、説明を加えていくようにする。例えば“Please come to Niigata.”と生徒が答えれば、「Which place is the most popular in Niigata?」と言う具合に、これまで培ってきた表現や語彙を用いながら、質問に答えパフォーマンステストの課題を達成することを期待する。

② パフォーマンステストの実際

パフォーマンステストでは、「ALTの妹が日本に来る際に、おすすめの場所や食べ物、体験を紹介する」というテーマで Interaction テストを行った。その際に人気の観光地ランキングや、新潟のグルメランキングの表を用意して参考にしても良いことにした。質問は“Do you recommend something interesting when ALT's sister visit Japan?” その答えに対する Further Question、そして“Which foreign country do you want to visit?”の3つで実施した。生徒は質問に対してよく答えられていたが、自ら比較表現を産出して英語で答えられる生徒はわずかだった。これは比較表現を必要としなくても会話は成立してしまうため、生徒は積極的に比較を使おうとしなかったためだと考えられる。しかし、“What is the most delicious food in Niigata?”など、こちらが比較表現を用いて質問した内容はどの生徒もよく理解できていた。

授業実践から生徒は、比較表現が必要な場面を設定されればそこから推測して比較表現を使うようになるが、目標言語材料を指定しない場面ではまだ積極的に比較を使い表現を工夫するまでには至らなかった。しかしながら、比較表現を用いた質問はよく理解し、なおかつ比較級や最上級を用いながら答えることができた。

今後は比較を使った方がより伝わりやすい場面で表現の工夫を促し、より良い表現を状況や場面に応じて選択できるように指導を継続していく。

(3) 今後の課題

TBLTでは意味内容中心に授業が構成され、文法は必要に応じて一時的かつ目立たないように、また帰納的に授業内で焦点を当てられる。しかしTBLTでの意味内容と言語形式のバランスにおいて生徒は言語形式を十分に意識して学習できているのかが、曖昧なまま授業が進められる場合が多い。どの程度文法に焦点を当てるかは授業者に一任されることが多く、言語形式へのフォーカスや明瞭さは教員によって均一ではない。また意味内容に比重を傾けるあまり文法形式の正確性や理解が学習者によってもばらつきがみられる。

しかしながら、形式重視の英語学習では学習者の意欲を低下させるだけでなく、言語習得の「内在化(intake)」のプロセスを踏まないため、インプットとしての質は低いことは多くの研究が示唆しているところである。今後もTBLTを軸に授業を構成していくが、言語形式とのバランスは実践を重ねデータを基に授業者としてスキルアップを図っていく。

今回プレゼンテーションの場をインプットとして捉え、パフォーマンステストでアウトプットの成果を測るアプローチを実践したが、こちらの予想を超えて期待される表現を理解して英語を伝えようとしている生徒が多かった。

しかしながら、正確さという観点では内容中心授業では生徒間で差が生まれてきてしまうのも事実である。豊富なインタラクションの中でも教師によるリキャスティングや、ライティング活動でも修正を促し、生徒は自らの間違いに気付き修正をしていくプロセスを軽視せず継続していく。

またTBLTは主体的な生徒を育てるために適した教授法であるが、一方で教師の高い授業力と英語力が求められる。個人の実践はもとより続けていくが、他クラスの英語教員にも意味内容を重視した授業展開を推奨し、学校単位ひいては新発田市単位で授業力向上に励んでいかなければいけない。

< 参考・引用文献 >

- 和泉伸一．『フォーカス・オン・フォームを取り入れた新しい英語教育』．大修館．2009
- 和泉伸一．『フォーカス・オン・フォームと CLILL の英語授業』．アルク出版．2016a
- 和泉伸一．『第 2 言語習得と母語習得から「言葉の学び」を考える』．アルク出版．2016b
- 鈴木渉．『第二言語習得研究に基づく英語指導』．大修館．2017
- 村野井仁．『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』．大修館．2006
- 松村昌紀．『タスク・ベースの英語指導 TBLT の理解と実践』．大修館．2017